

研究報告

学生相談における多層的支援

～居場所づくりの試み～

齊藤 美香¹⁾ 飯田 昭人²⁾ 川崎 直樹²⁾

1) 北海道大学 保健センター・元北翔大学学生相談室 2) 北翔大学 人間福祉学部 福祉心理学科

抄 録

近年、大学に入学しても、大学内外に人間関係を築けないまま不登校となり、いずれは中退に至る学生が増加している。‘居場所がない’ことが彼らに共通した問題となっている。この問題に対応するため、入学前からSNSを使って、人間関係を作るプログラムを導入するところ、学生相談室にフリースペースを設置するなど、各大学では様々な居場所づくりが試みられている。北翔大学では、2003年に学生相談室が設置されてから、相談室機能を強化してきた。個別面接のみではなく、フリースペースの設置、ワークショップ開催など多様な面から学生をサポートする試みを重ねてきた。

本研究ではこれらの活動をまとめ、学生相談における多層的支援のあり方について、検討した。

キーワード：学生相談，居場所，フリースペース

I. 問 題

1. 問題の所在

今から十数年前まで、学生相談においては、自主来談する学生への個別面接対応がほとんどであった。しかし、近年、個別面接だけではサポートしきれず、多方面の援助があつてようやく、学生生活を継続できる学生の増加や学生の問題の多様化が進んでいる。これに応じ、面接室のみにとどまらず、居場所づくりやグループ活動などの実践を行っている大学は増えている。

北翔大学（以下本学とする）においては¹⁾「平成10（1998）年頃から、様々な問題を抱えて入学してくる学生が増え始めてきた」。2000年、文部省高等教育局から出された報告書「大学における学生生活の充実について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—」（通称：廣中レポート）の後押しもあり、2002年より学生相談室設置準備室が立ち上げられ、2003年4月1日から学生相談室が開設された。

相談室の開設以降、年々、相談件数は増加してきた。個別面接に通う学生の中には、面接以外の時間にも、しばしば相談室に顔を見せるものもいた。また、相談申し込みはしないが、受付事務員とおしゃべりをする為に頻

繁に来るものも少なからずいた。彼らと関係ができてくるうちに、彼らはクラスに友達がほとんどおらず、講義の空き時間に居場所がないことが次第に明らかになっていった。

一方、せっかく相談室にはつながったものの、面接日から次の面接日までのつなぎの場がなく、休学やそのうち大学からフェードアウトしてしまう学生がみられた。

カウンセラーとの個別面接だけの支援の限界であった。また、メンタルな問題で休学し、復学する際に、まず講義に出る前に大学に慣れるというステップが必要な学生もいた。彼らにとってはカウンセラーとの1対1の面接だけでなく、いきなり一人で大学という大海原に放り出されるのでもなく、その中間の止まり木的な空間が必要ではないかという見解に至った。学内の教職員からの理解が得られ、2006年7月、保健センター横への移転の際に、フリースペースを増設し、学生への支援システムが一つ増えた。

2. 居場所概念

近年、フリースペース、談話室、休憩室などという名称で「居場所づくり」を活動の一環としている大学が増えている。「居場所」という言葉は元々、不登校の子ども達が学校以外の行き場として集ったフリースクールやフリースペースをさして呼ばれたことをきっかけに、広

がってきた。不登校問題に関連して用いられてきたので、小中学校の不登校児童生徒に関する研究で使用されることが多かった。しかし、大学生の不登校問題が顕在化するに従って、2000年以降は大学における「居場所」問題の研究にも拡がりをみせている。

大学における居場所づくりの先駆的な試みは1982年、九州大学における²⁾分裂病圏の学生が学生生活を送るための「Psycho-Retreat スペース」の創設が挙げられる。

その後、2000年代になると、各大学の学生相談室ではフリースペースの設置が進んできた。学生に部屋だけ提供する形をとるところ、グループ活動も取り入れるところ、学生の自主ゼミの場として活用するところ、カウンセラーが常駐する形態をとっている大学など、その運営方法は各大学の特徴に応じて様々である。フリースペースは各大学ともに増加傾向であるが、学生のニーズ面からの研究もされている。石田ら³⁾は大学生の居場所の現状を把握するためのアンケート調査を行い、①ほっとくつろげる安息の場 ②容易に自己表出できる自他認知・成長確認の場 ③教職員との関わりを望んでいることが明らかになった。また、大谷⁴⁾は大学生の居場所に関するアンケートを行った結果、居場所がないために休み時間が苦痛と感じる学生は①学内で静かに過ごせる。②くつろげる。③人と出会えたりする機能を持った場を希望していることが示唆された。

以上の研究からもわかるように、居場所づくりについてはただ単に静かにくつろげる場であるだけでなく、人との関わりがもてる場という両面を供給できることが必要であると考えられる。

3. 研究の目的

本研究は、本学学生相談室におけるフリースペースの運営状況をまとめ、学生相談における多重的支援のあり方について検討する。

Ⅱ. 方 法

1. 学生相談室の構造～学生を支える構造としての視点

学生を支えるためには、器としての学生相談室の構造がしっかりしていることが大前提である。「⁵⁾学生相談機関発展段階表」に照らし合わせて、本学の学生相談室の構造を評価すると以下の通りとなる。

- 1) 組織の位置付け：学生相談室規定で明示されており、予算も独立配分されている
- 2) 役割、機能：
 - ①学生相談機関の役割：個別相談のみではなく、コン

サルテーション、予防・教育。広報活動・全新生対象の初年次教育プログラムの正課教育（講義）を分担している。

②学生相談活動の種類：援助活動、教育活動、コミュニティ活動、研究活動の4領域の活動を行っている。

3) 利用者への利便性・設備

①学生相談の開設日：週5日のサービスが行われており、長期の休みも完全閉室せず、対応している。

②学生相談活動の種類：入学時、全学生に相談室パンフレットを配布。HP、掲示、相談室便り等でアクセスをしやすくしている。

③学生相談機関の施設：専有スペースを確保。保健センターと隣接し、心身からのサポートがスムーズに行くようにしている。

4) 人的資源：

①カウンセラーの配置数：学生約3000人に一人のカウンセラー対学生配置

②カウンセラーの仕事の量的負荷：時間外対応をする場合もある

③カウンセラーの常勤性、専任性、資格：カウンセラー4名は全て非常勤職。全て臨床心理士。

5) 相談の室の維持・向上：

①倫理・評価：明文化された様式は持っていない

②研修：外部研修の機会は持たれている

カウンセラーの常勤性と倫理・評価を除けば、相談機関としての発展段階としては充実し、学生を支える構造を兼ね備えていると評価される。

学生相談室の相談体制としては、各学部より1名の教員が相談員として在籍しており、必要に応じて、学生との面接が組まれている。また、カウンセラーは1日1名ずつ配置され、主な業務は個人面接となっている。原則として、初回に面接したカウンセラーがその後も学生の担当となる、担当者制をとっている。学生を入学から卒業まで、一貫してサポートすることができるようにしている。

2. フリースペースの概要

[構造]

学生相談室の向かい、保健センター横に位置する。開設当初は部屋全体を一つの空間として使用していたが、その後、学生のニーズに応じて、ついたてを立て、一部屋が幾つかのブース（写真1）で区切られたプライベートスペースのような形となった。カーペット敷きで、ソファ、学習用の机とデスクライト、学生便覧、シラバスなど学内情報の冊子、心理系、癒し系の書籍や雑誌を揃えている。



写真1 フリースペース

〔開室時間・ルール〕

開室時間は平日9時～17時。長期休暇中は閉室。

利用希望者は学生相談室受付にて学生番号を記入してから利用する。退室する際も受付に声をかけてもらう。

在室時間に制限はない。室内には利用ルールを掲示している。「静かに休みたい人のための部屋」という趣旨で運用している。

〔フリースペースでの活動〕

1) ワークショップ

ワークショップは2008年より不定期に開催された。各回、カウンセラー1名がコーディネーターとなり、運営を担当してきた。

表1 2008年ワークショップ実施状況

1/18	: 音楽療法
6/5	: 絵画療法
6/26	: マンダラ塗り絵
7/16	: 音楽療法
11/20	: コラージュ
12/12	: 音楽療法
12/18	: マンダラ塗り絵

2009年、ワークショップは出前ワークショップ形式となり、正課講義を使用して行われた。また、2010年からは、学生・教職員交流スペース“hug”での開催となったため、フリースペースでの活動には該当しなかった。

2) OPEN 相談室

ワークショップの参加人数が少なく、一部の学生の利用に限られていることから、相談室にもっと入りやすくするための試みとして、OPEN相談室が企画された。昼休み時間帯に相談室を開放し、自由に入出入りし、カウンセラーとお茶を飲みながら話せるという気軽さを前面

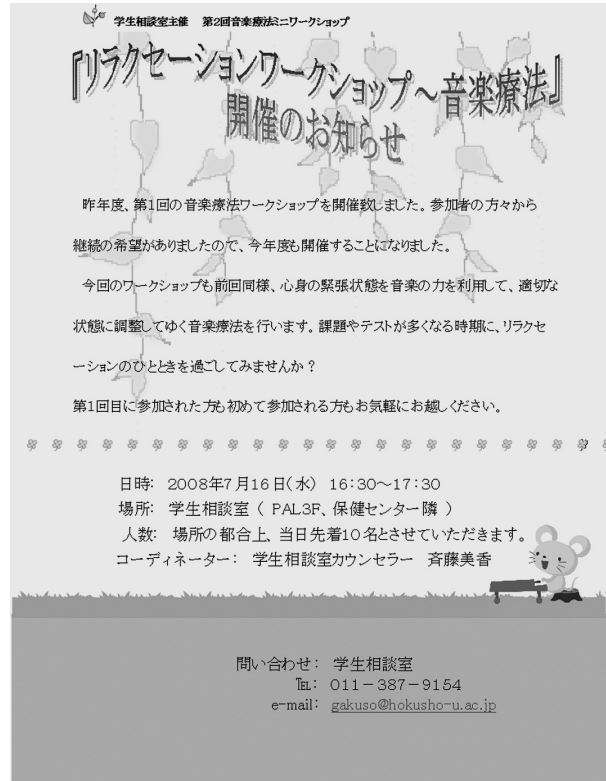


図1 ワークショップ案内ポスター

に出した。2009年6月23日に第1回目を開催し、その後10月より第一月曜のお昼休みに計3回開催した。

広報は学内の掲示板へのポスター掲示(図2)と、各自が持ち帰れるよう、ポスターを縮小した形のフライヤーを作った。

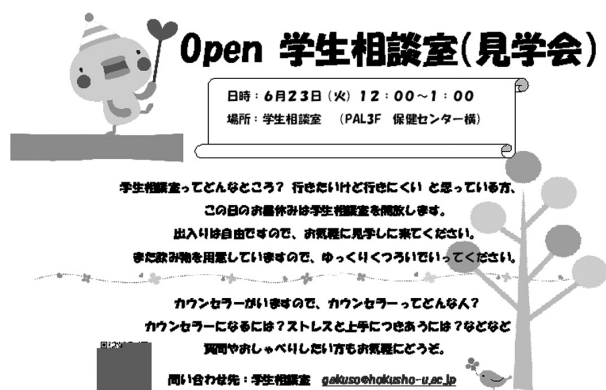


図2 OPEN相談室案内ポスター

Ⅲ. 結 果

1. フリースペースの利用状況

利用状況の統計は2010年度から開始され、表2のとおりである。

フリースペース利用者数は年々増加傾向にある。特に

表2 利用状況

年 度	実人数(名)	延人数(名)
2008年度	18	163
2009年度	19	224
2010年度	39	423

*2010年度は2010年4月～12月の利用状況

表3 月別延人数

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
2008年度	1	4	21	33	3	43	28	15	11	4	163
2009年度	26	26	29	41	5	30	32	23	11	1	224
2010年度	40	65	61	67	18	71	55	46			423

※フリースペース完全閉鎖期：8月・3月

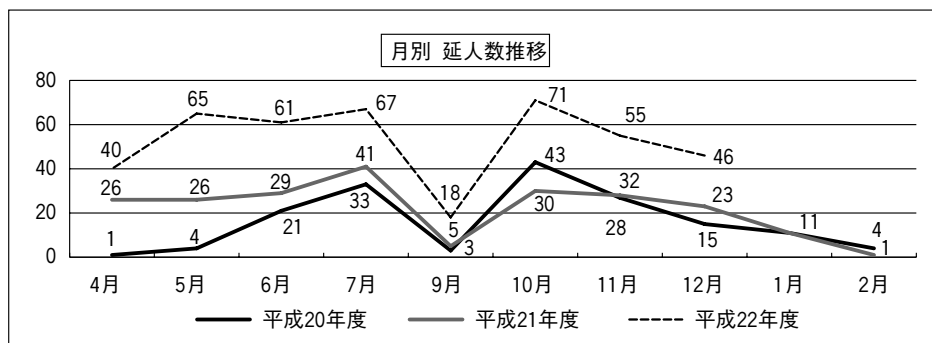


図3 月別人数推移

2010年度の利用が増加している。2009年度までは利用者のほとんどが相談室来談者で占められていたが、2010年度は相談室の来談者以外の利用が増加していることが要因として挙げられる。また、相談室での面接が終結、または中断した学生のフリースペースのみの利用も増加していることが特徴である。

月別で見ると、9月に利用が落ち込んでいるのは、9月の下旬から後期が始まるので稼働日数が少ないためである。どの年度も前期は試験や課題の多くなる7月がピークとなっているが、後期については、新学期初めの10月がピークでその後、緩やかに利用は減少し、試験や課題の多くなる1月の利用は減少している。前期と後期の傾向の違いについて、理由は不明である。

2. ワークショップの報告とアンケート

ワークショップの実施状況については表4のとおりである。全7回開催されたワークショップの延べ参加人数は30名、1回平均4.3名となる。絵画系ワークショップの1回平均参加人数は4.8名。音楽系ワークショップの1回平均参加人数は3.7名であり、絵画系ワークショップの参加人数の方が多い。参加者の中で相談室利用者は23名、未利用者は7名となり、相談室利用者の参加が多

いことがわかる。また、相談室利用者については複数のワークショップに参加する傾向が見られた。

表4 ワークショップ実施状況

日 ち	内 容	参加人数(名)
2008/1/18	音楽療法	7
2008/6/5	絵画療法	6
2008/6/26	曼荼羅塗り絵	5
2008/7/16	音楽療法	3
2008/11/20	コラージュ	1
2008/12/12	音楽療法	1
2008/12/18	曼荼羅塗り絵	7
計		30

各ワークショップの後半の時間帯にフリーディスカッションの時間を取り入れたが、多くの質問が出され、感想の分かち合いも行われた。

参加人数は少ないが、参加者からは「こじまりとして、安心して参加できた」「少ない人数なので、じっくり取り組み、質問にも細かく答えてもらえてよかった」と参加人数が少ないことのメリットが感じられ好評で

あった。

終了後、アンケートをとった結果が、表5のとおりである。11名については、参加者の性別のみとなっており、設問への回答はされなかった。

アンケート結果は、内容については「良かった」という評価であり、「今後も参加したい」という希望が多かった。実施時間については、全学部の学生の都合の良い時間帯を合わせる点では、どの時間帯にしても、参加しづらい人が出てくるだろうと意見があった。また実施場所については、ある音楽療法のワークショップの実施回のみ、廊下の声が聞こえて集中できなかったので「静かな環境でしたい」という意見が3名から出された。

表5 ワークショップアンケート

性別	男 4	女 26
内 訳	良い	悪い
実施時間	18	1
実施場所	16	3
内 容	19	0
今後参加希望	19	0
そ の 他	アロマの香りがとてもリラックスした 試験期間中にリラクセーションできたのでよかった 床にすわりたい 卒業生にもしてほしい 相談室内だと参加しづらい 狭い 外がうるさい 広告をわかりやすくしてほしい	

3. OPEN 相談室の報告とアンケート

OPEN 相談室の参加者は第1回目の9名のみで、その後、第1月曜というように固定した曜日に行った3回はいずれも参加者がいなかった。第1回目はOPEN 相談室当日に校内放送を数回入れるなど、広報に力を入れたが、2回目以降は校内放送を入れなかったこと、通常でも相談希望が少ない月曜日に企画をしたという曜日選択のミスが重なったことも要因として考えられる。

第1回目の参加者にはアンケートに協力してもらった。その結果が表6のとおりである。全員が相談室の存在は知っていたが、ほとんどの人にとって、相談室は気軽に行けるところでないというイメージを持っていることがわかった。しかし、一度来てしまえば「イメージとは違って意外と良さそうなところ」という感想も寄せられた。実際、このOPEN 相談室をきっかけに、後日、面接希望で相談室に来談した学生が数名いた。

参加者の約半数は教員からの紹介によってOPEN 相談室に参加したということは、学生にとっていつも身近

にいる教員からの宣伝効果は期待しやすいのかもしれない。尚、参加した学生からはOPEN 相談室という企画そのものは好評であった。

表6 OPEN相談室アンケート

内 訳		
参加者	男 5 名 女 4 名	
以前より相談室を知っていたか?	はい	9 名
相談室のイメージ	行きにくいところ	2 名
	特別な問題がある人が行くところ	1 名
	自分には関係ないところ	1 名
	必要な時には相談にいけるところ	1 名
	気軽に行けるところ	1 名
	相談が無いと行けないところ	1 名
OPEN相談室を知った経緯	教員から	4 名
	ポスター	5 名
また来たいか?	はい	4 名
	いいえ	0 名
	相談があれば	5 名
その他	もっと気軽さがほしい	2 名
	名前に気軽さがほしい	1 名
	毎月定期的にOPEN相談室を開催してほしい	1 名
	掲示物が見にくい、もっと宣伝した方がよい	2 名

4. フリースペースを活用しての個別学生支援

フリースペースは前述のような不定期に開催されるグループ活動だけではなく、むしろ日常的には個別の学生への支援に活用されている方が多い。主な活用例について述べる。

1) 空き時間の休憩利用

利用者のほとんどは、一人利用で、講義と講義の間の空き時間に滞在する場所として使用している。仮眠をとる、課題をする、本を読む、友達とおしゃべりする、昼食をとる、受付に寄り、スタッフとおしゃべりするなどである。「クラスメートや知っている人に会いたくないので図書館には行けない」「人の目が気になって学食には一人では行けない」「他に人がいるところは疲れるので人気のないところで過ごしたい」「保健センターのベッドで寝るほどの不調ではないのでソファで休みたい」という理由が挙げられる。空き時間に小休止し、また講義に出ていくという止まり木的な居場所として活用されてきた。

2) 不登校傾向のある学生のプログラムの利用

相談室に定期的に面接に来談しているが、心身の不調のため、限られた講義しか出席できない学生やほとんど講義に出られない学生に対して、カウンセラーが適当と判断した場合は、カウンセラーとの面接の他にフリース

ペースを使ってのリハビリ的プログラムを組むことがあった。“大学に慣れ、滞在する時間を徐々に増やしていく”という目的に沿って、フリースペースで過ごす時間のアレンジを行った。カウンセラーとの定期面接以外に短時間、カウンセラーと会う時間を設けるなど個々の状態に応じた活用を試みてきた。

病気休学していた学生が復学する際には復学前からコンタクトをとり、学期が始まる前にフリースペース登校しながら、準備を整えつつ、復学がスムーズに行くようなサポートをしてきた。

3) 学生同士の交流の場としての利用

相談室に通っている学生の中には対人関係がうまく作れないという悩みを持っている人が多数いた。その中には「クラスのできあがった人間関係の中に入っていきはできない」「自分とは違って、人とうまくやっている人とはかえって引け目になるので接することができない」と感じている人もいた。「自分と同じように人づきあいが苦手だ」という悩みを持っている人であったら、話せそう」というニーズも何人かから寄せられた。フリースペースの常連になると、同じような常連の存在が気になり、「話かけてみたいけどきっかけがつかめない」「勇気がでない」と打ち明けられることもあった。自分から話しかけられるようになるためにどうしたら良いかというテーマをカウンセリングの中で話題にする場合がほとんどであったが、状況に応じてはフリースペースにカウンセラーが向向き、その場にいる学生たちに話しかけ、学生同士が話せるきっかけづくりを担うこともあった。フリースペースで出会った学生同士がその後、友達づきあいに発展するケースも見られた。

IV. 考 察

1. 居場所機能としてのフリースペース

これまでのフリースペースの利用状況をみると、表2の通り、利用人数は年々増加しており、相談室来談者の利用にとどまらず、未来談者へも広がりを見せている。オープンキャンパス時にフリースペースを見学して、「こういう場所があるなら、安心して入学させられます」「うちの子が良い部屋だと言っていた意味がわかります」などと保護者からも好評である。また、ここを足がかりに卒業していった学生も何名もいる。そのほとんどが「ここがなかったら卒業できたかどうかかわらない」という言葉を残していった。「ただいま～」と受付に声をかけてから入室し、「行ってきます」と言って講義に出かける学生もいた。こちら「行ってらっしゃい」と送り出す風景は日常茶飯事である。ただ単に学内

のどこかにスペースを作るのではなく、相談室の横にあり、自由度は保たれつつも、大人の目があり、気が向けば、受付や保健センターに寄って、スタッフと話せるという環境が学生にとってはちょうど良い居場所となっていると考えられる。I-2で述べたように、くつろぎと人との関わりの両面が保障されるスペースであることが必要であると思われる。

2. フリースペース以外の居場所機能

大学内にはクラス、ゼミ、研究室、サークル、図書館、食堂、休憩スペースなど様々な居場所が提供されている。学外にも上記のどこにも居場所を見いだせない学生の一部が保健センターや学生相談室を訪れる。それらの学生と出会った相談室は彼らにとっての居場所づくりを一緒に探していくことが求められる。居場所を単に‘場所’に限定しないで、企画等まで含めるとすると、フリースペース以外にも相談室が提供する居場所機能としては、ワークショップと初年次教育プログラム（正課教育）、新入生へのメンタルヘルス調査とフォローアップ活動が挙げられる。初年次教育プログラムはカウンセラーが、全入学生にメンタルヘルスに関する講義を行うものである。これにより、全入学生に直接、相談室のカウンセラーが顔見世をして、身近に感じてもらうことができる。更に、講義は充実した学生生活を送れるような内容にしているため、居場所の大切さと居場所の作り方にまで触れている。また、新入生へのメンタルヘルス調査とフォローアップ活動は、全入新生にUPI調査と入学後の不安についての設問に答えてもらい、心配のある学生や相談室からの連絡希望者にカウンセラーから連絡をしてフォローアップするものである。このフォローアップ活動を通じて、相談室につながり、学生生活を継続するための支援が開始された学生もいる。

以上の通り、相談室では個人面接、フリースペースの提供以外にも学生の居場所づくりの機能を担っていることがわかる。

3. 多層的支援

学生が大学に自分の居場所を持ち、学生生活を全うしていけるためには、多方面からの支援が不可欠である。相談室をとりまく環境で提供できる支援については、図4のように示される。

本学の相談室が開設されてから9年足らずで、ここまでの多層的支援システムが整備されたことは画期的なことである。相談室が学生支援に必要なだと考えたことを実現するのが比較的スムーズであったといえる。

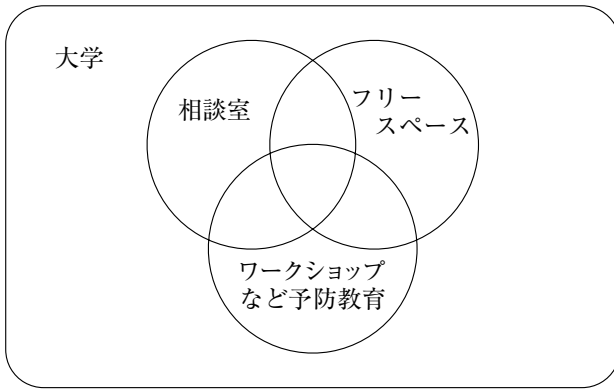


図4 学生相談室が提供する多層的支援

相談室がスムーズに機能するためにはまず、学内の教職員から相談室の存在が知られていることと必要性を理解されていることがなければ成り立たない。教職員の理解があって初めて、相談室のハード面、ソフト面の充実が現実のものとなっていく。相談室で働くスタッフが教職員＝大学から‘自分たちは守られている’という安心感があって初めて、学生を守る力となることができる。いわば、学生への多層的支援の土台は「大学」ということになる。その中で、相談室、フリースペース、ワークショップなどの予防教育がそれぞれ重なりあって、学生を多層的に支援するものとして機能していくこととなる。

V. ま と め

本研究により、本学の学生への居場所づくりが多層的に機能していることがわかった。様々な課題を抱える学生を支えていくためには大学が入学した学生にどうしてほしいか？など大きくいえば大学がどのような理念に基づいて教育機関として存在しているかが影響されると思われる。学生をかけがえのない存在として大切に思い、大学教育の中で全人的成長を応援していくという方向性が教職員間で共有されていることにより、学生へのきめ細かく、多様な学生の対応しうるだけの多層的な支援が実現されてきたと考えられた。

2009年12月に学生教職員交流スペース“hug”が設置された。多層的支援にもう一つ輪が加えられたことになる。今後は交流スペースとフリースペースの連携と全学生へのユニバーサルな学生支援が課題として挙げられる。

稿を終えるにあたって、学生相談室活動を支え続けて下さった北翔大学教職員の皆さま、フリースペースの管理及び活動状況のデータの集計など多大な尽力を頂いた、学生相談室受付の丸山由希子氏に深く感謝致します。

付記

本研究は平成22年度北翔大学北方圏学術情報センター研究費の助成を得て実施された。

引用文献

- 1) 川村道夫：「学生相談室のあゆみ」, 北翔大学学生相談室報告書 (2003～2007年度), pp1-3, 2008
- 2) 峰松 修ら：「分裂病圏の学生とPSYCHO-RETREAT」九州大学 健康科学 第6巻, pp 181-186, 1984
- 3) 石田妙美ら：「大学生のサイコロトリートスペース (居場所)」Campus health vol 37(1), pp234-237, 2001
- 4) 大谷真弓：「本学の学生相談活動の傾向と学生の居場所について」大阪工業大学紀要人文社会編第52巻第1号, pp24-55, 2007
- 5) 福盛英明ら：「学生相談体制充実のための学生相談機関発展段階表の開発」日本学生相談学会第28回大会発表抄録集, pp107, 2010